閃光の下から

昭和二十年長崎城山国民学校の記録

朝日ソノラマ編集部編

閃光の下から—昭和二十年長崎城山国民学校の記録

昭和45年9月15日　初版発行　　検印省略　¥ 490

編　者　朝日ソノラマ編集部
発行者　岡　崎　文　樹
印刷所　凸版印刷株式会社

発行所　104 東京都中央区銀座4—2—6第二朝日ビル　振替東京40311　電話(563)6021　株式会社 朝日ソノラマ

落丁本、乱丁本はおとりかえします　　© Asahi Sonorama 1970

(分) 0095 (製) 003003 (出) 0049

閃光の下から

目　次

第一章　城山の夏　5
第二章　八月　19

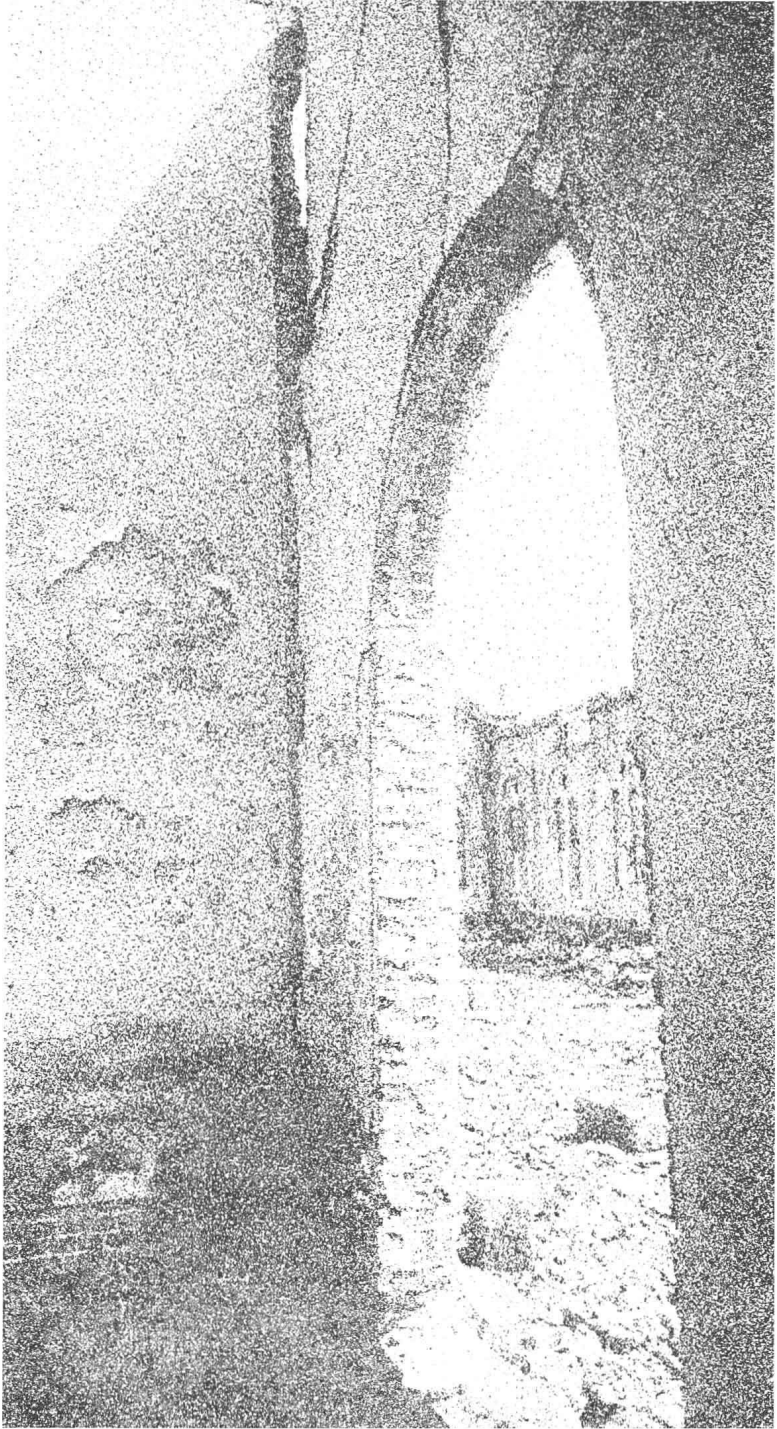
第三章　寒く長い冬――111
授業再開への努力……稲佐へ……借部屋学級……寒く長い冬……慰霊祭……年が明けて……それぞれの岐路……生徒たち……涙の卒業式
被爆直後の長崎を撮る／松本　栄一――288
あとがき――301

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

装幀
版画

原田維夫

第Ⅰ章　城山の夏



長崎の八月――

草いきれでむせかえる浦上川にそった坂道を、母親と娘が登って行く。

曲り角の家は夾竹桃の生垣だ。赤い花の冠を支えて葉は緑色の炎のように、微風にゆれる。

母親が娘に教える。

「夾竹桃の花は、仏さまが好きなさらん花なんよ」

そういう古い言い伝えは、この子には、何の意味もない。しかし、母親にとって、夾竹桃は、悲しい思い出の花なのだ。

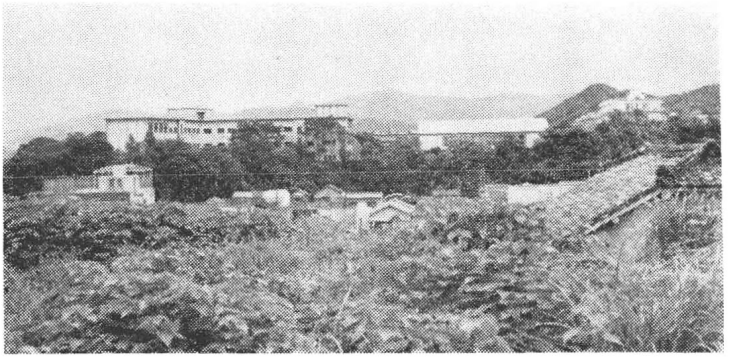
母親――久松リツ子は、肉親や、多くの友だちを失った、あの夏のことを思う。あのときも、やはりこのように、夾竹桃が咲いていた。そして自分は、この子と同じ小学生であった――と。

それは、二十五年前――昭和二十年の夏のことであった。

＊　＊　＊

久松リツ子の通学している城山国民学校は、浦上谷の西側の小高い丘にあって、浦上川と国鉄長崎本線をはさんで、浦上の天主堂がやや北寄りに対する位置にあった。

大正九年、長崎市は、浦上、山里の両村を編入したが、この地区は急速な発展を示し、城山に市営住宅の建設が始るに及んで、児童数は飛躍的に増大した。これまで、同地区には、山里尋常小学校があるだけで、収容の限度を越えたので、城山に新学校を開設することになった。これが、



木立に囲まれた現在の城山小学校校舎

城山尋常小学校で、大正十四年四月十二日の創立、所在は城山町一丁目八十番地であった。

校舎は、小学校では長崎県で最初の鉄筋コンクリート三階建で、当時としては、かなりモダンなぜいたくなものであった。

初代校長は高梨秀善。島根県から招かれて来た高等師範出身の教育理論家で、科目によって生徒が教室を移動するダルトン・プランの提唱者であった。二代目は、「愛の教育」で評判の高かった桑原恭助を、福岡県から招いた。

このような、市が示した教育の熱心さは、当然、城山地区発展への期待につながっていた。新市内の浦上には、三菱とそれに関連する諸工場が続々と新設され、規模を増大していった。それと並んで、旧市街がすでに飽和状態にあったので、市民は、浦上の丘陵地帯に住宅地を求めた。

その結果、この地区には、中等、高等教育を受けた中堅サラリーマンや官吏が多く移り住み、教育を効果的に行い易い

環境になっていった。

こうして、城山尋常小学校は順調な歩みを続けていたが、昭和七年の五・一五事件、十一年の二・二六事件と世相には暗い影がさし始め、十二年七月の日中戦争へエスカレート、政府にとって軍国主義的思想統一の必要が生じて来た。そこで、文教政策の根本的改革案として打出されたのが、尋常小学校の国民学校への改組であった。

十六年国民学校令が公布され、四月一日から、明治五年の学制発布以来存続して来た尋常小学校の名は、国民学校に変り、積極的に戦事教育が推進されることになった。

そして、十二月八日。日本は太平洋戦争に突入、破滅への道を踏み出したのである。このとき、リツ子は国民学校の二年生であった。

戦争中といっても、十七、八年ごろまでは、まだしもゆとりがあったようである。昭和十八年度まで城山校長であった坂本守道は、当時の城山校について次のように述懐している。

「校舎も立派だし、子どもたちも質がよかった。それに先生方にも意欲がありました。進学の成績も抜群ですし、保護者も熱心でしたね。保護者会、町内会、婦人会のほかに、母の会というのもあって、必要な経費は十分出してもらえましたから、教育の環境としては申し分なかったと思っています」

それが、一、二年の間に、学校は教育の場とはいえなくなってしまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

二十年になると、硫黄島が陥ち、四月には米軍の沖縄本島上陸が開始され、六月には全島が占領されるに至り、この長崎にも、空襲は日に日に激しくなり、四月二十六日の大波止駅付近の爆撃は、市民に大きなショックを与えた。

リツ子は、六年生になっていた。

「学校に出て行っても、じきに、警戒警報が出るので、はじめは机の下かなんかにかくれたりしていましたが、これではあぶないということになって、すぐ家へ帰るようになりました。近所で学年別のグループを作って、学校へは行かずに、家で勉強をしていたんですよ。山口タヅ子さん、久松美代子さんなんかといっしょのグループでした」

リツ子のいうように、授業は、四月、五月と、しだいにひんぱんになる空襲警報におびやかされながらも、どうにか続けられてきたが、六月に入って、学校での授業を中止し、各地区隣組別に学習をする家を決め、教師は分担して、生徒が集合している家へ出かけて行って学習の指導をした。

また、一週間に一度か二度は、生徒を登校させ、時局の話をし、諸注意を与えていたが、それも、一時間ぐらいで終えて、生徒を家に帰らせるようにしていた。

この巡回教育では、教える科目も限られたものしかできず、国語や算数の自習がせいいっぱいというところである。教師は、生徒の自習状態をみて、問題点があればチェックしたり、世話を

している母親と、指導法について話合ったりして帰って行った。

教科の内容は、戦時色一色で塗りつぶされていた。そして、一時間の授業の中で、戦意高揚の内容がもられていないと、その教師の授業はダメだという判定を受ける——万事がそういった調子であった。

また、校長命令、教頭命令は「天皇陛下のご命令である」といって、通学区域の住民を動員するときなど、この言葉は、非常に大きな効果があった。

当時の城山校の校長は、清水佐生であった。清水は、校長会の理事として、中心的な役割を果していたので、公務が多く、そのため、六月十五日付で、小ケ倉国民学校から転勤して来たばかりの荒川秀男教頭が、学校の運営、事務などを行っていた。

子どものいない学校には、三菱兵器の事務部門が移って来て、校舎の一部を使用していた。職員は、田を借りて米を作ったり、運動場を掘返して芋畑にしたり、花壇の跡などでジャガイモやナス、キュウリ、崖のところなどには、カボチャを植えたりした。

清水佐生

荒川秀男

城山校の周囲は、相当大きな木のある自然林で、林間教室と呼ばれる広い林が、校舎の後方に広がっていた。ここは、生徒にも教師にも愛された憩いの

場であり、夏の暑い時期には、実際に教場としても使われていた。

大本営発表（昭和二十年八月七日十五時三十分）

一、昨八月六日広島市は敵B29少数機の攻撃により相当の被害を生じたり

二、敵は右攻撃に新型爆弾を使用せるものの如きも詳細目下調査中なり

昭和二十年八月八日付朝日新聞は「広島へ敵新型爆弾　B29少数機で来襲攻撃」の大見出しで、広島への原子爆弾投下を次のように報じている。

六日午前八時過ぎ敵B29少数機が広島市に侵入、少数の爆弾を投下した。これにより市内には相当数の家屋の倒壊と共に各所に火災が発生した、敵はこの攻撃に新型爆弾を使用したもののごとく、この爆弾は落下傘によって降下せられ、空中において破裂したもののごとく、その威力に関しては目下調査中であるが、軽視を許されぬものがある

敵はこの新型爆弾の使用によって無辜の民衆を殺傷する残忍な企図を露骨にしたものである、敵がこの非人道的行為を敢てする裏には戦争遂行上の焦燥を見逃すわけにはいかない、かくのごとき非人道的なる残忍性を敢てした敵は最早再び正義人道を口にするを得ない筈である

敵は引続きなほ今後もかくのごとき爆弾を使用することが予想されるのでこれが対策に関しては早急に当局より指示されるはずであるが、それまでは従来の防空対策、すなわち都市の急速な疎開、また横穴式防空壕の整備など諸般の防空対策を促進する要がある、今次の敵攻撃を見ても少数機の来襲といへどもこれを過度に侮ることは危険である

敵は新型爆弾使用開始とともに各種の誇大なる宣伝を行ひ、既にトルーマンのごときも新型爆弾使用に関する声明を発しているが、これに迷ふことなく各自はそれぞれの強い敵愾心をもって防空対策を強化せねばならぬ

八月八日の朝、城山国民学校で教師をしている江頭千代子の家では、朝食のとき、新聞に掲載された「八月六日、広島市に新型爆弾投下」の記事について話題がのぼっていた。県立商業の教師をしている夫の卯吉は、

「おばあちゃんと、子どもだけでも、早く疎開させたほうがいいね」

と、真剣にいったが、工場一つなく、今まで一度も爆撃を受けていない城山地区には、市内の繁華街に住む人たちが、家族の分散疎開のため移住して来るほどで、千代子は安心していた。

城山国民学校六年生の長女の美津子と、次女の晴美、三女の和美の三人は、千代子の小学生時代の式服で、長い袂に松竹梅の模様を染めた黒木綿の紋付を仕立て直した揃いのモンペをはき、

はしゃいでいた。千代子は、配給のメリケン粉で作ったドーナツや、非常食の乾パン、救急医療品の詰ったリュックサックをめいめいに背負わせて、町内の防空壕まで連れて行った。とくに四女の直美の袋には、その他に粉乳からおしめのような乳児用品がいっぱいではち切れそうなありさまだった。子どものリュックに食料品や衣類をつめてやること、それが千代子の出勤前に行う日課の一つとなっていた。

この日――毎月八日は大詔奉戴日であったから、戦時意識の高揚という意味もあって、城山国民学校では、職員全員約三十人で、学校用水田の草取りをすることになっていた。千代子は、集合場所に決められている浦上の大井手（長崎市昭和町）へ急ぐ途中、永山シズと会い、

「広島には新型爆弾が落されたそうだが、こんな田舎なら大丈夫だから、こんどは子どもたちをリヤカーに乗せて連れて来ようか」

などと話している。

集合時間は午前九時だったが、城山で集って来るはずの清水佐生校長らの姿がまだ見えないので、千代子たちは、近所の農家を回って、昼食用のカボチャやジャガイモを買い集めていた。

そこへ、村上信子が来た。

「城山へ向う途中で警戒警報になり、警防団の人にむりやり防空壕に入れられて遅刻したら、校長にひどく叱られました」

昭和19年３月撮影の城山校職員記念写真，前列左より林田喜美子，宮本スミエ，１人おいて下田ルリ子，森文代，高橋千代，木下クニ子，５人おいて吉野レイ子，後列左から，板東市朗，岩永博信，大曲敏男，宮本繁作，江頭千代子，大谷博，２人おいて神尾方明，野田瑞穂（教頭），１人おいて坂本守道（校長）後列右から２人目岩永エミ子

城山での集合時間は八時だった。この日は米機が瀬繁に来襲した。ひっきりなしに少数機が上空を旋回しては去って行くのである。早く到着したものは一時間も待たされる結果になった。厳格さをもって鳴る清水校長は、

「ここへ来ることを何時に約束しておったかね……」

と、かなり昂奮気味で、遅刻した事情を説明をしても聞入れない。そばにいた荒川秀男教頭が、

「遅れた分は仕事で取返そう。今日はうんと働いてほしい」

と、とりなしてやっと収まった。

学校用水田は、浦上貯水池の北側の長与村（現・西彼杵郡長与町）にあり、二反あまり（約二十アール）を借りていた。これが二回

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c